2026/11/20
エルシーアイ株式会社
ケータハムカーズ・ジャパン

CATERHAM CUP JAPAN PETRONAS Syntium Series Rd.3@筑波サーキット レースレポート



【プロローグ】

今年からスタートした「CATERHAM CUP JAPAN」は、世界各国で開催されている「CATERHAM CHAMPIONSHIP」をモチーフとした新たなレースシリーズです。日本市場に最適なナンバー付き車両「SEVEN 170」をベースに、FIA 基準適合の安全装備を施したワンメイクマシン「SEVEN 170 CUP」でタイトルを争います。

2026 年 5 月に筑波サーキットで開幕した東日本シリーズ「PETRONAS Syntium Series」、そして 6 月に岡山国際サーキットで幕を開けた西日本シリーズ「OBERON Series」。それぞれ年間 3 戦・東西合わせて全 6 戦で争われるシリーズは、ここまで東西ともに 2 戦を消化し、年間タイトルを賭けた白熱のバトルが繰り広げられてきました。そしていよいよ 11 月 15 日、筑波サーキットにおいて東日本「PETRONAS Syntium Series」の最終戦を迎えました。





エルシーアイ株式会社 / ケータハムカーズ・ジャパン
145-0061 東京都大田区石川町 2-1-1
TEL：03-5754-2227
https://www.caterham-cars.jp/

【予選】

第 2 戦のスポーツランド SUGO から約 5 カ月のインターバルを経て、CATERHAM CUP JAPAN PETRONAS Syntium Series 第 3 戦・最終ラウンドの舞台となった筑波サーキット（茨城県下妻市）は、朝から小雨まじりの曇天で、時折雨脚が強まる状況となりました。CATERHAM CUP JAPAN のワンメイクタイヤとなるヨコハマタイヤ「ADVAN dB V553」はウェット性能に定評があるものの、セッティングや走行ラインによってはコントロールが難しくなることを、参戦ドライバーたちは十分に理解しているようです。それゆえ、午前中に行われたウェットコンディションの予選では、シリーズ初参戦の#11 日下田選手と#13 吉田選手を加えた全 15 台が、慎重にピットレーンを後にしていきました。



ウェット路面でなかなかタイヤが温まらない状況ながらも、ひとつでもポジションを上げたいドライバーたちは果敢にアタックしていきます。コースイン 2 ラップ目に#73 田中選手が 1 分 17 秒台をマークすると、#22 齋藤選手、#98 山田選手も次々にペースアップ。#41 古濱選手と#37 大野選手も自身のラップタイムを更新する中、レース巧者の#80 佐藤選手（賞典外）が 1 分 16 秒台のベストタイムを記録しました。

序盤の難しい路面状況にハーフスピンやコースアウトを喫するマシンもあったものの、幸いいずれも即座に再スタートが切れたことで、赤旗中断やセーフティカー導入はなし。規定の 15 分間いっぱいまでアタックが続いた結果、ポールポジションは#80 佐藤選手（賞典外）が獲得しました。続く 2 番手の#41 古濱選手から、セカンドローの#73 田中選手と#98 山田選手、その後方 3 列目の#37 大野選手、#22 齋藤選手までの 5 台が 1 分 17 秒台後半という僅差で決勝レースに挑みます。





エルシーアイ株式会社 / ケータハムカーズ・ジャパン
145-0061 東京都大田区石川町 2-1-1
TEL：03-5754-2227
https://www.caterham-cars.jp/

【予選コメント】

予選 1 位 / #80 佐藤 考洋選手 / 1 分 16 秒 063（賞典外）

「今回は他カテゴリーに出場しているので、そのぶんアドバンテージがあったかもしれません。今回セブンで初めて筑波を走りましたが、とにかくコントローラブルで楽しい！ 数周で終えようと思っていましたが、楽しさのあまり結局最後まで走ってしまいました」

予選 2 位 / #41 古濱 暢洋選手 / 1 分 17 秒 661

「雨の筑波サーキットは経験がなかったのですが、ブレーキが難しいと思いました。最終コーナーでトラクションが抜けてスピンしたのには焦りましたが、クラッシュを回避できたのは幸運でした。田中選手とは僅差ですが、決勝ではうまく自分のペースを掴みたいです」

予選 3 位 / #73 田中 宏昌選手 / 1 分 17 秒 668

「まったく乗れていませんでした。ケータハムでウェットの筑波サーキットを走るのは初めてだったので難しさを感じましたし、特にダンロップコーナーではスリップする恐怖との闘いで全然踏めていません。決勝レースはスタートを失敗せずに食らいついていきます」





【決勝】

朝から降り続いた雨が小康状態となった午後の筑波サーキット コース 2000。5 分ディレイのコースオープンで全 15 台の SEVEN 170 CUP がピットレーンから静かに走り出し、シグナルグリーンからのフォーメーションラップでも路面状況を確かめながら、入念にタイヤをウォームアップしていきます。そして、グリッドについた各マシンから緊張感が漂う中、いよいよ CATERHAM CUP JAPAN PETRONAS Syntium Series 最終戦、15 ラップの決勝レースがスタートしました。



エルシーアイ株式会社 / ケータハムカーズ・ジャパン
145-0061 東京都大田区石川町 2-1-1
TEL：03-5754-2227
https://www.caterham-cars.jp/

乾ききらない路面に対して激しいプッシュを避けた全車はクリーンなスタートを切り、#80 佐藤選手を先頭に、それぞれがベストと考える走行ラインで 1 コーナーに突入していきます。ここで早々に#73 田中選手が 2 番手に浮上し、中団グループからは初参戦の#11 日下田選手が 5 番手にジャンプアップするなど、各コーナーでサイド・バイ・サイドの見応えある攻防戦が繰り広げられました。

レースは序盤から大きく動きました。#98 山田選手と#41 古濱選手が激しく 3 番手を争う間に、#73 田中選手が最終コーナーで#80 佐藤選手をパスして先頭に立つと、1 分 11 秒台にまでペースアップして後続を引き離していきます。





一方、3 番手争いに迫っていた#11 日下田選手は痛恨のスピンを喫し、#22 齋藤選手、#37 大野選手、#25 笹尾選手、#18 高橋（和）選手らのグループに追いつかれます。その後方では#66 高橋（基）選手、#23 小野津選手、#19 IMACH 選手、ニューカマーの#13 吉田選手、#17 西田選手、#20 坂倉選手らも中盤からペースを上げていきましたが、大きな順位変動はなく、そのままチェッカーフラッグを迎えました。

こうして最終戦の決勝レースは#73 田中 宏昌選手が制し、続く#80 佐藤 考洋選手が賞典外となるため、#98 山田 一弘選手が 2 位、#41 古濱 暢洋選手が 3 位となりました。この結果、17 ポイントを加算した#98 山田 一弘選手が合計 49 ポイントを獲得し、CATERHAM CUP JAPAN PETRONAS Syntium Series 初年度のシリーズチャンピオンに輝きました。





エルシーアイ株式会社 / ケータハムカーズ・ジャパン
145-0061 東京都大田区石川町 2-1-1
TEL：03-5754-2227
https://www.caterham-cars.jp/



【決勝コメント】

決勝 1 位 / #73 田中 宏昌選手 / 1 分 11 秒 237（ベストラップ）

「決勝レースはスタートのミスで出遅れましたが、冷静なドライブを心掛けました。路面状況を掴めたのが大きかったです。最終コーナーで#80 佐藤選手のミスを逃さずパスしてからは、ペースを維持して走り続けました。来シーズンはシリーズチャンピオンを目指して頑張ります」

決勝 2 位 / #98 山田 一弘選手 / 1 分 12 秒 138（ベストラップ）

「スタートで出遅れましたが、#80 佐藤選手に追いつきたい一心で走りました。ドライラインを選んで、引けるところは引き、プッシュすべきところは攻めました。表彰台を狙えるとは思っていなかったのですが、年間チャンピオンを意識してかなり緊張しましたね」

決勝 3 位 / #41 古濱 暢洋選手 / 1 分 12 秒 040（ベストラップ）

「スタートはうまくいきましたが、ハーフウェット路面を意識して大外のラインを選んでしまったので、#98 山田選手との接近戦でも焦ってペースを戻しきれませんでした。今シーズンは色々と学ばせてもらいました。来年は自身のドライビングを成長させたいです」









エルシーアイ株式会社 / ケータハムカーズ・ジャパン
145-0061 東京都大田区石川町 2-1-1
TEL：03-5754-2227
https://www.caterham-cars.jp/

《 ケータハム 》

ケータハム（ケータハム・カーズ・リミテッド）は、1973 年にグラハム・ニアンがロータスの創業者コーリン・チャップマンから「SEVEN」の製造設備、設計図、デザイン、そして独占権を獲得して以来、軽量で 2 人乗りのスポーツカーを生産しています。チャップマンへの敬意を込めて、ケータハムは現在も「走る楽しさ」をすべての活動の中心に据えた哲学を貫いています。顧客一人ひとりに合わせたパーソナライズされた体験の提供に力を入れており、好みや走行スタイルに応じて理想の一台を仕立てられる豊富なオプションを用意しています。公道走行用からサーキット仕様まで、幅広いニーズに対応しています。

英国の自社工場でのみ生産されるケータハムの車両は、現在ケント州ダートフォードに本社を構え、1987 年以降、完成車およびキットカーの形態で製造を続けています。2023 年時点で、世界 15 の主要市場において 30 以上の正規販売店ネットワークを展開しています。

また、モータースポーツ部門の一環として、あらゆるレベルのドライバーを対象とした英国の 5 つのレースシリーズを運営しています。1995 年以来、エントリーレベルのレースシリーズであるケータハム・アカデミーでは、1,300 人以上の初心者ドライバーがレーシングドライバーとしての資格を取得しました。ケータハムは、日本最大級の自動車ディーラーグループの一つである VT ホールディングスの傘下にあります。VT ホールディングスは、2009 年よりケータハムの日本における輸入総代理店であるエスシーアイ株式会社も傘下に置いてきましたが、同社は 2026 年 4 月 1 日付でエルシーアイ株式会社へ吸収合併され、現在は VT ホールディングス傘下のエルシーアイ株式会社がケータハム輸入総代理店業務を継承しています。

<本件のお問い合わせ先>
エルシーアイ株式会社　ケータハムカーズ・ジャパン　広報：森田　恭平
東京都大田区石川町 2-1-1　TEL：03-5754-2227
MAIL：morita@caterham-cars.jp